

### ③ 大ワーディー遡行徒歩現地調査 (ジーザン・ベースキャンプにて)

1976年1月24日

西都隊長とジャット・アルモートまでの道を下見調査に出かけた。ワーディー・バイシャを遡る。大きな石がごろごろ転がり、自動車に入れるぎりぎりのところまで進んだ。もうこれ以上はラクダに乗るかあるいは徒歩でしか行けない。ジャット・アルモートとは「死の谷」を意味するのか？ これから先には何があるのだろうか。不気味だ。でも現調地域なので調査をしないわけにはいかない。

1976年1月25日

現在やっている地域の地形があまりに険しく、車でのアクセスが困難なため作業も思うようにはかどらない。

先週も7パーティーが1シートのために一斉に入ったが、現調は完了しなかった。隊員の一人はしびれを切らして、ヘリコプターを使ったらと提案した。軍のヘリをチャーターしてガイドを乗せて空中から現調をしたらよいというのである。もちろん上空から一気に現調できたらそれに越したことはない。それが出来たらどんな楽なことだろう。でも土地の人をヘリに乗せて空から見た場合、地形を正しく把握できるだろうか。彼らは上空から見ることになんか慣れていないだろう。物事はそう簡単にはいかない。またサウジのことだからたくさんの手間がかかるだろう。

そんな安易な方法は考えない方がいい。一步一步足で歩いて隈なく調べるしかない。

そんな訳で、私は明日から単独でサブキャンプをして一番厄介なところを1週間かけて現調に行くことに決めた。

西都隊長からも許可をもらった。隊長も「行ってくれるか。お願いするぞ」といつてくれた。

昨日下午見調査してきた大ワーディー、ワーディー・バイシュを車の入らないところから徒歩で遡上し、そのワーディーに注ぎ込む支流をすべて調査し、悪名高いジャット・アルモートの近くまで現調してくる予定だ。

まあ、どれだけ歩けるか分からないがヘリコプターなんかに頼らないで、とにかく少しでもノルマを片付けてしまおうと思ったからだ。

1976年1月26日

単独サブキャンプ。ハンラールと2人きりで出かけた。ハンラールが現地人の中で一番信頼でき、寡黙で従順な男だから、私は彼をこの最も困難な徒歩現調の同行者に選んだ。私たちはノーザンヒジャーズの現調時から彼を使っているが一度も信頼を裏切られたことはない。

ワーディー・バイシャの途中まではドライバーのネイヤーフに車で送ってもらって、そこから歩き出した。

私は途中で、その地域のシェイフ（区長）であるという男のテントのところに立ち寄り、これからワーディーを遡って調査する旨を伝えた。それと同時にシェイフよりラクダを1頭借りた。ラクダには食料と寝具を積みこんだ。私たちはラクダには乗らない。荷物専用だ。ハンラールがラクダの手綱を引いていく。このワーディーで出会った土地の人たちは、驚くかな、外見は野蛮人そのもの。男たちは腰巻をつけただけでほとんど裸。そして頭髮は長く伸ばし、強い匂いの油で固めている。彼らの家は、今まで見てきたベドウィンのテントとは違って、全く簡単な天幕だけ。まるでアフリカの首狩り族みたいだ。でも外見とは異なり彼らは素朴で親切そのもの。私たちがラクダを連れてワーディーを進んでいるのを見つけると近寄ってきて「お茶を飲んでいけ」と引き止められ、私たちは常に引っ張りだこであった。

しかし私たちは急ぐ旅だからと断って、ひたすらワーディーの河川敷を歩いていった。ワーディーにはちよろちよろと水が流れていた。

1976年1月27日

今日は、歩きに歩いた。

ワーディー・バイシュに流れ込む支流のワーディーを遡る。これも思った以上に長いワーディーであった。名前はワーディー・アルカーン。

私たちはラクダを、途中で見つけたあるベドウィンのテントに預かってもらった。ラクダはワーディーの河原を歩くのには足手まといだと判断したからである。またそのベドウィンは上流地域の地名を良く知っているということなのでガイドとして雇って3人でワーディー・アルカーンを遡った。ベドウィンは良く見るとまだ若者で、精悍そうな顔立ちの中に幼さを残していた。

私たちは歩き詰めに歩いた。そして最後にその川の源まで、すなわちヒジャーズ高地が聳えるところまで達した。

ガイドのベドウィンの青年の足は強く、時々駆けるほどでびよんびよん砂地を

蹴っていく。私とハンラールは幾度も遅れをとってしまうほどだった。  
実は、このワーディーにはさらにそれに注ぎ込む支流が10個ほどもあった。  
今回その10個の名前を確実に収集することが出来た。それは何よりもうれしかった。大きな収穫だ。ベドウィンの若者のおかげだ。  
もと来た道を辿り、ラクダを預かってもらっているそのベドウィンのテントに  
帰り着いたのは夕方7時過ぎ。私たちは夕闇にうっすらと白んだワーディーの  
河原を跳ぶがごとくに早足で走った。でもそのときは何も疲れを感じなかった。

途中で私は、舌を巻くようなことがあった。  
私は喉が異常に渇いてしまった。私たちは水筒も持っていないし、その付近の  
ワーディーには水は流れていなかった。河原は岩また岩、それに砂。  
そのときベドウィンの青年が、「イウタミドゥ アライヤ」といった。「俺に任  
せろ」の意味である。彼は下を向いて歩き出し、あるところまで来ると「イフ  
フィル フナー」（ここを掘ってみろ）と言った。ハンラールが木の棒で砂を掘  
り始めた。段々掘り進めると砂の色が濃くなり、50cmも掘ると砂が濡れた  
ようになって、ついには水がじゅくじゅくと滲み出てきたのである。凄い。は  
じめ水は濁っていたが待っていると次第に澄んできた。私は手で掬って飲んだ。  
これで生き返った。さすがベドウィンである。どこに行こうともちゃんと水の  
でる場所を心得ていたのである。

1976年1月28日

ランプをラクダの背に縛り付けていたら、一日中揺れていたのか、ガラスが  
割れてしまった。それで今晚から唯一の明かりであるランプがなくなってい  
しまった。

今、焚き火をたくさん焚いてその脇でこれを書いている。  
今日も歩いた。足首が痛くなるまで。大きな岩がごつごついっぱい溢れてい  
るワーディー内の歩けるところを探しながらひたすら歩いた。昼間はじりじり  
照りつける太陽が容赦なく私とハンラールとラクダを襲いつづけた。途中動か  
せるような岩があるところは2人がかりで押してそれを取り除いてから進んだ。  
そうしないとラクダが通れないからである。

一抱えもありそうな岩を私が押しのけた途端、ハンラールが叫んだ。「アクラブ、  
アクラブ」（さそり、さそり）

ぽっかり開いた窪みに今まで見たこともないような大きさのさそりがいた。全  
長30cmくらい。真っ黒な肢体。

普通アラビア半島のさそりは茶色で10cmくらい。刺されてもすぐ血清を打

てばなんということはないが、こんな大きなのに刺されたらひとたまりもないだろう。ハンラールは、「アーウズ・ビッラー、アーウズ・ビッラー」（くわばら、くわばら）と言って、石を拾って投げ、殺してしまった。

途中でベドウィンの子供たちや女たちが何事かと珍しそうに私たちに付いて来た。私は彼らにテープレコーダーの日本の歌謡曲を聞かせてやると目を丸くして驚いた様子だった。ここは近代文明と隔絶した世界としか言いようがない。このワーディーではかなりの水があって鮮々と流れていた。私たちは裸足でじゃぶじゃぶと水の中を歩いていく。小魚がいる。おたまじゃくしがいる。私は時々手で掬って水を飲んだ。水が流れている限り私たちは安心だ。途中で年寄りのベドウィンをガイドとして雇って、さらにワーディー・バイシュを進んだ。

1976年1月29日

今日も歩いた。喘ぎながら歩いた。足の痛みを堪えて歩いた。じゃぶじゃぶと川の中を歩いて幾10キロ。私の頭の中にはただ歩かねばならないという至上命令だけで歩を進めている。ハンラールも黙ってラクダを引いてついて来る。川原の砂の白さの何とまぶしく目を刺すことか。

私は木の枝を折り、杖にして突いて歩く。右足の踝（くるぶし）が疼いてしょうがない。老いたベドウィンのガイドは肩に乗せた棒に両手を置いて規則的に体を揺らして、私たちの前に行く。その足は踝が太く、歩くたびに筋肉が現われ何と逞しいことか。彼は、「ここは私の土地です」というだけあって地名をよく知っていた。

谷川の流れの音が耳にさわやかだった。しかし私はいくらその水を飲んでもすぐ喉が乾いてしまう。何回も水を掬って飲んだ。小魚がぴゅうぴゅう逃げていく。

1976年1月30日

今日で5日目。歩くことにも慣れた。昨日まで痛んだ足も痛みを感じなくなった。ただ1歩1歩、歩けばそれだけ仕事が早く終わることだけを楽しみに何も考えずに歩いた。今日で2面現調が終了したことになる。人間の足だけで歩いて仕事するこのことのどんなに難しいか初めて知った。また文明の利器（自動車）の有り難さがしみじみ分かった。

今日は、昼があまりに暑かったので、ワーディーの端に生えていた棕櫚の大木

の陰で昼寝して、午後3時ごろから歩き始めた。  
ワーディー・ラーハを遡る。

1976年1月31日

午前中最後の現調として、ワーディー・ラーハをさらに進んだ。ガイドの老人は肩に棒をかけ、それに両手を乗せて、とことこついてくる。もう少し行けば予定最終地点に着くことができる。私は杖を頼りに太陽光線に刺しぬかれながら無気力にただ歩いているだけ。

でも昼の12時ごろ、ようやく目的地に到着。そしてそこに流れ入るいくつかの支流の名前を聞き出し、現調を完了することが出来た。ガイドの老人は棕櫚の木の木陰で砂の地面に何本も線を引いてワーディーの流れを説明してくれた。私は正確にそれらの名前を地図上で確認することが出来た。これで一安心。

帰路、ハンラールが落伍。

足を痛めてついてこれなくなってしまったのである。いかにも足が痛々しそうで見えなかった。私も右足の付け根が歩くたびに鈍く痛むけれどもまだ十分歩ける。私とベドウィンの二人とハンラールとの間はますます距離が空いて、ついには振り返っても彼の姿は見えなくなってしまった。今夜の野営地は彼も知っているから心配ないとは思いますが、少々無情だったかなと後悔した。

私とベドウィンは6時ごろにはワーディーの中州の野営地に着いた。私は火を起し、食事を作って彼の到着を待っていた。

ハンラールは8時ごろひょこひょこ足を引き摺りながら、ようやく到着した。彼は倒れるように、すぐ毛布を被って寝てしまった。

1976年2月1日

ただひたすらワーディー・バイシュを戻る。明日までに帰着くためには今日距離を伸ばさなければならない。

昨日倒れてしまったハンラールも今朝はどうにか歩けるようになった。もうこれでベースキャンプに帰れるということで懸命についてくる。

途中でベドウィンの男が私たちに同行。彼は逞しそうな顔立ちで、長髪に蓬（よもぎ）のような草を束ねて結んでいる。男はワーディーに沿って歩かず上への山道を歩けば近道になると教えてくれた。そのおかげで来るときに難儀した急流の箇所を避けることができ、かなり時間を短縮することが出来た。時折私もラクダを引いて歩いた。ラクダは頭の良い動物で、なにも指図せずとも自分で

よい道を選んで歩いてくれる。また道に一度ラクダの通ったお椀を伏せたような足跡があるとそれに判を押したように同じ歩幅で辿っていくこともおもしろい。

夜は、このサブキャンプではじめに泊まったマルハジャというところで泊まった。珍しく空には雲が張り出している。

1976年2月2日

今日いよいよ徒歩による単独のワーディー・バイシュの現調が終わる。私ははじめにラクダを借りたシャイフのところをめざして歩いた。ハンラールとベドウィンのガイドは、もう仕事も終わったので後からゆっくりシャイフのところまで行くからということであつたので私ひとり先に出発した。

これで試練も終わる。もう少しで歩かなくても良いのだ。私はやり遂げた安堵感の方が強く、それまで痛かった足もそれほど苦にならなかった。

午後1時ごろにはワーディー・アルカーンの合流地点に達した。

ああ、私はこの1週間歩き通しに歩いたのだ。私としてもこんなに長い間歩いたのは生まれて初めて。1日50kmは歩いたことになる。

人間は歩くことによって本来の人間に帰ることができるのではないだろうか。

私は歩きながらいろいろなことを考えた。足が棒になって苦しいときも、私はこれから先何をなさねばならないか、何が一番大切なことかを無意識に考えていた。そしていかに人間が弱い存在であるかつくづく思い知らされた。

夕方、私はシャイフのところに到着した。

すでにドライバーのネイヤーフも我々を迎えに来てくれていた。彼は今朝から来て我々をずっと待っていてくれたという。本当に有り難い。

シュ克蘭、ヤー・ネイヤーフ！

ところが、ハンラールはなかなか到着しなかった。

私たちはシャイフが用意してくれた居間で休んでいた。私は少し心配になった。

3時間くらい経った頃だろうか。私たちの借りたラクダが、あるベドウィンの男に連れられて帰ってきたのである。その男に事情を聞くとハンラールに頼まれたのだという。ハンラールのことをもっと詳しく聞くと、驚くかな、彼は途中でまた歩けなくなってしまい、たまたま会ったその男にラクダをシャイフのところに返してくれとお願いしたらしいのである。私は全く心配になった。ハンラールは無事だろうか。私は、すぐさまネイヤーフとそのベドウィンと一緒に今帰ってきたワーディーを半時間ほどかけて遡った。もうあたりは大分暗くなっている。ベドウィンはすぐハンラールを見つけた。彼は二人が会った場所

から動けずにうずくまったままでいた。彼は全く力なく、弱ってはいた。しかし意識はあった。私たちは付近で急遽ロバを借り、彼を乗せ同じ道に戻った。もう辺りは真っ暗。私たちは押し黙ってワーディーの水をじゃぶじゃぶ渡った。星がおぼろに水面に写っていた。

夜11時ごろ、われわれ（私とハンラールとドライバーのナイヤーフ）はベースキャンプに無事帰還することができた。西都隊長をはじめ皆もテントから出てきて我々を迎えてくれた。ご苦労様でした。

1976年2月4日

ハンラールは、今日は気分が悪く何も食べられないという。幾度も吐いたそう。多分マラリアに罹ったのかもしれない。夜、車がみなサブキャンプに出て全部出はらっていたので、メカニックの祖父江さんにメルセデスのローリーを運転してもらい、彼を乗せ、アブー・アリーシュの診療所へ連れていった。

1976年2月5日

ハンラールはマラリアではなさそう。過度の疲労による憔悴のようだ。私が今回の徒歩現調に彼を特に指名し、引き連れて行ってしまったのは私の責任だ。申し分ないことをしてしまったと思った。

1976年2月6日

終日、整理作業。

1976年2月8日

ひび井氏がジェッダより現調成果を取りにベースキャンプに来られた。ぜひ一度キャンプに入って現場を見たいといわれていたのでようやく実現したということ。

しかし、私の方は少々忙しかった。ルブ・アルハーリーの現調のレポートやら、成果チェックで休む暇もない。レポートは夕方に、チェックは深夜1時頃終了。まずは一安心。

明日は、また徒歩でのサブキャンプ。いよいよジャッラト・アルモートへ行く予定。

1976年2月9日

サブキャンプ。数時間も山道を車で揺られ、埃だらけになってしまった。アル・レースという村まで行き、今日はここで野宿。今回のサブキャンプは、原さん、岩松さん、杉沢さんと一緒。今度も全行程1週間に亘る徒歩による現調。アル・レースは山間の小さな村。私たちは着くとすぐアミール（村長）に挨拶に行った。アミールは私たちの到来を歓迎してくれ、とても協力的ですぐロバとガイドを出してくれるよう手配してくれた。

さあ、今夜は昨日までの寝不足解消と明日からの歩きのために早く寝よう。我々は村の外にあるワーディーの中で、それもごつごつした石の上で眠った。

1976年2月10日

アル・レース村より歩き現調開始。ここからは車が入らない。アミールのおかげでラクダ1頭、ロバ1頭、それにガイドを2名雇うことが出来、朝9時全員出発。

ジャッラト・アルモートまでは2日かかるという。2つ山を越えなければならない由。またひたすら耐えなければならない旅が始まった。今度は、私は決して無理せずに歩こう。

雇った2人のガイドは、2人ともまだ若く、鉄砲を担いでいかにも精悍そうな眼差しであった。彼らは歩きながら私にいろいろ話しかけてきた。

1976年2月11日

昨夜はベドの家のそばで野宿。岩盤で覆われた窪地だが、ガイドがそのベドを知っているということで泊まることにした。他にないのでそのベドから水をもらったが、その水たるや濁って、その上皮袋くさくて飲めたものではなかった。しかし近くに井戸はないし鼻をつまんでそれを飲まざるを得なかった。皆は早く寝てしまったが、私は星空の下、短波のラジオを聴きながら11時頃まで起きていた。

1976年2月12日

朝、夜明けとともに出発した。ジャッラト・アルモートを目指して、あと少しだ。空は白みかけ、金星が透き通るようにかかっていた。

ジャッラト・アルモートへは、1時間少々で到着した。

ジャッラト・アルモートは2つのワーディーが合流する低地の部分を指す地名であった。昔は人が住んでいたというが、今はマルカズ（検問所）があるだけでただの河原であった。

しかし、ガイドからよくよく聞いてみると、ジャッラト・アルモート（死の谷？）はその名前が示すとおりの、不気味なところだった。すなわちこの場所はこの地域のいくつかの部族の領土のちょうど境界線に囲まれた空白地帯で、現在でもこの地域では領土をめぐる部族争いが続いているという。例えばある部族の領土に他の部族の者が侵入したら殺されること必定らしい。また他所から来た見ず知らずの者が各部族の領土に無断で足を踏み込めば、たちどころに発砲されるかもしれないという。

私たちはこのことを聞かされて、今夜まさにこのジャッラト・アルモートに野宿しなければならないと思うと少々気持ち悪かった。私たちはアル・レースから連れてきたガイド兼護衛がいるから安心だと自らに言い聞かせてワーディーの中央にキャンプを張った。どこからも見られる所の方が逆に安全ではないかと思ったからである。私たちは火を焚いて簡単な食事を取ってすぐ横になった。護衛のガイドは銃に玉を込め、安全装置をはずし、常に体のそばに置いていた。2人は火を囲み、交代で寝ずの番をしていたようである。

1976年2月13日

昨夜は、ジャッラト・アルモートでの少々不気味な野宿にまんじりともしなかった。

今朝は早くより、私は岩松さんとガイド兼護衛でワーディー・ダブフを遡った。今日は3時間も歩けば、かなりの数の支流の名前を収集することができるであろう。

水は、狭い谷間に細く続いていた。所々で土地の女や子供たちが川に出て洗濯していた。私たちが行くと珍しそうに見ている。女は紺の衣を着、頭にお釜みたいな帽子を被っていた。ワーディーを渡る朝の風が気持ちいい。特に日陰はヒヤッとして爽快そのもの。

少し行った時、同行のガイドの足が止まった。これから先は自分の部族の領土ではないので行きたくないという。私たちは困ってしまった。このままでは現調のノルマを果たせない。でも前方に危険があることをみすみす知りながら行くことも出来ない。どうしたらよいのであろうか。

そうこうして立ち往生して30分くらい経ったであらうか。ひょっこり上流の方からベドウィンの初老の男がこちらにやって来た。彼は銃を持っている様子

はなく、私たちに笑顔で、「アッサラーム・アライクム」（こんにちは）といいながら近づいてきた。私たちは彼と握手をした。彼は我々に敵対心を抱いている様子はなく、むしろ人のよさそうな感じであった。ガイドはその男とひそひそ話をし始めた。明らかに上流の様子を聞いている様子だった。ベドウィンは、すぐ先にある自分の家（テント）に寄っていけと言う。私たちは、これはいい人に会ったと思い、彼の提案に同意した。彼のテントは川沿いに立ててあった。テントの前の川で奥さんを思われる女性が洗濯をしていた。私たちは彼のテントに寄せてもらった。そのベドウィンはひとり息子をガイドとして出そうといってくれた。私たちは彼の好意に感謝した。今日はついている。息子为先頭に我々は上流を遡った。彼はよくワーディーの名前を知っていた。上流からそのベドウィンのところに帰ってくると、娘さんであろうか、目のくりくりした女の子がお茶を出して私たちを迎えてくれた。

1976年2月14日

ジャッラト・アルモートより帰る。悪名高きジャッラからようやく帰れる。我々は来た道と同じ道を辿った。杖を突き、岩を避けながらひたすら歩いた。行きに登った山も、帰りは倍きつかった。所々でベドウィンが羊の群れを放牧させている。谷に渡る風は言いようもなく心地よい。これで難所の現調を終えたかと思うとさすがに嬉しい。

夕方、山を越えて、岩盤の山裾に住むベドウィンのところで泊まった。その家はただ岩に藁を乗せて屋根とただけのもの。ここでは蠅が多いのには驚いた。人から食器からすべてのものに黒々とたかっている。でもその家の人は平気で座っている。私たちはほうほうの態で逃げ出し、岩の上の方で眠った。

1976年2月15日

ようやくアル・レースに着いた。当初の予定より1日早かったわけだ。ロバに乗って村に入ると、みな村人は家の窓から顔を出した。私たちは会う人ごとに挨拶をし、市場の横にラクダを膝まづかせ、荷を降ろした。私たちはすぐアミールのところに行った。アミールは、「ハムダラー・アラー・サラマ」（よくご無事で、お帰りなさい）と言って私たちを一人ひとり抱きしめ、私たちの帰還を喜んでくれた。

聞くとところによると、原さんと杉山さんは昨日、ガハラ山より下山し、ベースキャンプから迎えに来ていた車で帰ったという。

私たちは、あいにく明日にならなければ車が来ないということなので今晚はア

ミールの処で一夜を泊めてもらうことにした。

夜、同行の岩松さんが故郷の作並温泉の話をしてくれ、しばし日本を思った。

1976年2月16日

アル・レースのイマーラの一部屋で、昨夜は久しぶりでベッドの上でぐっすり眠った。今朝、山間にあるアル・レース村は霧に沈んでいた。

アミール家で朝食をいただく。パンと肉スープ。私たちが食べていると、アミールの娘であろう、小さな女の子がアミールの背中にそっと隠れて、私たちの方をじっと見つめていた。アミールによく似ている。子供の瞳はあくまで澄んで大きい。私たちがその子の方に目をチラッと向けると、はにかみながらアミールの後ろに身を隠す。全くかわいい。

迎いの車は午後1時に来た。ああ、これで救われた。

いよいよ村を去る時、今回ガイドとして同行してくれたヤヒヤーとムハンマドやその兄弟たちが見送ってくれた。ここには1週間ほどしかいなかったのになぜか胸にこみ上げるものがあつた。もう2度と会うことがないだろうと思うと自然と別れの握手に力がこもってしまう。

車は、途中の道を一路ベースキャンプへと猛烈なスピードで埃を巻き上げ帰っていった。

ジャッラト・アルモート（死の谷）もついに「征服」されたのだ。

1976年2月17日

今日は振り替え休暇。久しぶりの休み。

午前中、花のスケッチを描いた。ジャッラト・アルモートに行く途中、岩山で野宿した時見つけた花。マリーゴールドにちょっと似た黄色い花。

私はそれを丁寧に紙に包んで、鍋の中に入れて持ち帰った。なぜ鍋の中に入れたかという、あの時持ち物はすべてラクダの背に乗せてしっかり縛って移動していたが、花なんてもって歩くことなんてできないので、米を炊く鍋がちょうど空いていたのでそれに入れておいたという訳。

すぐ枯れてしまうのではないかと心配したが、キャンプで開けてみるとまだそれほど萎れていなかった。すぐ水を入れたコーラのビンに挿してみると、みるみる葉がピンと立ってきた。何と遅いことか。しかし茎の形だけは、鍋に入られて何日もラクダの背に揺られたせいか、鍋の形にあわせて丸く曲がったままだった。これも一興。

1976年2月18日

先日の徒歩現調の成果の整理をした。この整理をすることで現調は完結するわけだが、いざ整理しだすといくつもの疑問箇所が出てきた。もう現地に戻るわけにはいかない。どうにか岩松さんとも頭をつき合わせて一つ一つあいまいな箇所をつぶしていったが、つくづく現地調査の難しさを感じた。整理を完全に終えた時は、まるで現調に行った時と同じような疲労を感じた。

1976年2月20日

ジーザンからリヤドへ出張。成果提出のため飛行機で。  
飛行機は途中ナジュランとシャローラに寄った。私にはとても懐かしい所だ。飛行機がティハーマ（紅海沿岸地方）からヒジャーズ山系に上昇する時は圧巻だった。下から2000級の山々の頂に向かってぐいぐい沸き上がる入道雲。その真ん中へ飛行機が轟音とともに突進していった。私の座席の窓ガラスは一面綿菓子が付いたようで、何も見えなくなった。  
少しして厚い雲切れ目より下界が見えてきた。私は目を凝らす。蛇行するワーディーの流れが見える。あれは先日足を引き摺りながら歩いたワーディー・バイシュに違いない。場面はめまぐるしく変わる。褐色の山々の頂が見えてきた。私たちが息を切らして登った山もその中にあるだろう。よく見ると褐色の地表に引っ掻いたような線がいくつも見える。それは舗装をしていない道路だ。私は窓に顔を押し当てて下を見つけた。感慨無量。  
リヤドに近づいた。飛行機が高度を下げるに従い、雲は灰色に変わり、窓に雨粒が強く当たり始めた。  
リヤドは案の定寒かった。セーターとコートをもって来てよかった。

1976年2月21日

リヤドでは「マップス社」にお世話になり、そのヴィラの一室に泊まらせてもらった。ヴィラにはMr. クーリーとMr. サーミーがいて、歓迎してくれた。この前来たときは、誰もいず、ガランとしていたが今回来てみると着々と作業場としての体裁が整ってきたようだ。彼らと食事をともにしたが彼らの食事の質素さには驚いた。ただアラビックパンとチーズだけ。出稼ぎのレバノン人たちは本当に切り詰めてやっているのだろう。

1976年2月22日

ASDで仏人のラピエール氏と打ち合わせ。アシールの地名の密集地域の対応について話し合った。1シートで何百もの地名があったのだ。

結論として、現地調査は今まで通りで、集められるすべての地名を収集すること。そして整理段階でオーバーレイを2枚使い、一枚にはすべての地名を盛り込み、もう1枚には、こちらサイドで盛込むに相当と判断し選択した地名のみを書き込み、その2枚を提出してくれをいうことだった。

1976年2月23日

夜、リヤドよりジェッダに着いた。

ジェッダも久しぶりだ。オフィスではひび井さんが迎えてくれた。

オフィスも大分手入れが行き届いて、私たちが居た時より整頓されてきれいになっていた。

嬉しいことに日本から手紙が2通届いていた。

(写真15、ジャッラト・アルモート現調、ワーディーを徒歩で遡る。岩松氏と)



(写真16、ジャッラト・アルモート現調、現地人の子供たちが集まってくる)



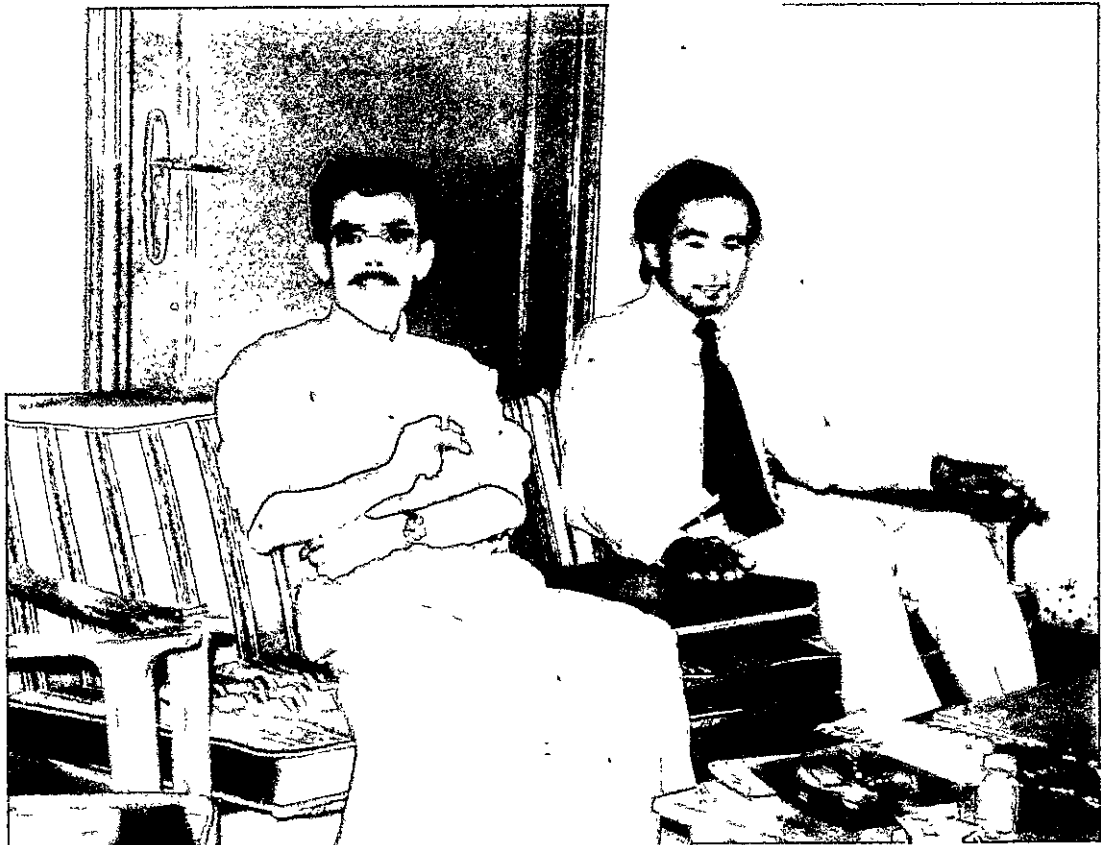
(写真17、ラクダと行く岩松氏)



(写真18、ジャッラト・アルモートにて)



(写真19、ジェッダのオフィスで、ひび井所長と)



(写真、20、アシール現調チームの精鋭たち：右から、栗原さん、ハンラール、  
原さん、西都隊長、大脇さん、出口さん、本田、春日さん)



(写真21、アシール現調チームの全員。現場作業終了時<1976年4月末>に撮影)

